

『治る・治らない』より『育つ・育てる』

国際医療福祉大学大学院 修士 1 年目

学籍番号 18S1120 徳井有里

明石洋子様 明石徹之様

ご講演の間、終始涙を流しておりました。どうしてなのでしょう？

それは、「かわいそう」ということではなく、徹之先生の立派なお姿に感動していたのと、それを母として見守る洋子様の姿、言葉に感動していたからだと思います。

私は、看護学生の時に、実習で出会った障害児施設のお子さんが今でも忘れられません。彼は、9pトリソミーとあまり聞きなれない病気を抱えていたのですが、何事にも一生懸命で、そして何よりもとても素直な方でした。生まれたときに母親から「育てられない」育児放棄をされてしまい、その施設にいました。実習の最後には、どうしても引き取りたいと、おもったのですが、まだ学生だった身、果たせませんでした。

洋子先生がおっしゃっていた「ポジティブ思考」は子育ての醍醐味ですね。

『治る・治らない』より『育つ・育てる』という視点は、たとえ子供に障害がなくても一番大事なことだと思います。

さらに、徹之さんという自分の子供をしっかり観察した上での、自閉症の方の特徴を対応方法「具体的・視覚的・肯定的な伝え方」は、まさにどんな人とコミュニケーションをとる上でも、本当に大事なことではないかと思います。「分かっていないから・病気だから」できないことがあるけれど、目標を指し示して、それに意欲が生まれれば取り組める」というお言葉も、まさに、洋子先生がしっかり徹之先生を見ていらした上での子育て方法なのだと理解しました。そのようなところに、徹之先生が公務員試験を合格できる力があるのでしょうか。相手が自分の子供であっても、というか自分の子供であるからこそ、徹之先生のすべて認め、徹之先生らしい生き方を、徹之先生自身が選択できる環境を整えられたことに、私は感動し、そして尊敬をさせていただきました。

さらに、地域への働きかけは本当に素晴らしいと思います。

自分だったら絶対にできないと思いますが、そこは母の子を思う力なのでしょう。「障害者の権利宣言」が内発的動機となり、地域への活動が始まったのかもしれませんが、やはり「明石通信」の発行やそれを地域にお配りになる洋子先生のビデオの中の姿は、言葉にできない感動をいただきました。

最後に、今回のご講義で、私は、もっと「自閉症」やASDなどの病気を勉強してみようと思ったのと同時に、自分の住む地域では、そのような活動がされているのか知りたいと思い、調べてみます。そして、何か自分でもできることがあれば、貢献してみたいと思います。本当に貴重なご講演ありがとうございました。